

甲状腺は前頸部にある内分泌(ホルモン)臓器です。重さが20g前後です。これが30g以上になると甲状腺腫として触診されます。病気としては、「働き」と「形」の異常があります。「働き」過ぎがバセドウ病、「働き」の低下が橋本病です。「形」の異常は良性と悪性の腫瘍があります。「働き」の異常にはある程度「形」の異常もともないます。「働き」の異常の確診がつけば薬で治療できます。「形」の異常でがんの心配がなければ定期的な超音波と血液検査で経過をみれば大丈夫です。

甲状腺ホルモンは新陳代謝を刺激する働きがあります。その分泌は脳下垂体との情報交換によってサーモスタットのように制御されています。「働き」の異常の2つの病気の診断は特徴的な自覚症状と超音波所見、脳下垂体ホルモン(TSH)、甲状腺ホルモン(FT3,FT4)のアンバランスと自己抗体の存在によって合理的に可能です。バセドウ病はプロピルチオウラシルあるいはチアマゾール、橋本病はレボチロキシンNa(T4)水和物の内服で治療します。いくつかの副作用に注意すれば安全に治療できます。自覚症状の安定とTSH、FT4、FT3などのバランスの正常化が治療のとりあえずの目標です。

良性の「形」の異常には全体がそのまま大きくなる単純性甲状腺腫と局所的にしこりを形成する占拠性病変があります。自覚症状と超音波所見とサイログロブリン、カルシトニン、CEAなどの腫瘍マーカーの変化をフォローしてゆけば、怖がらずに病気とつきあうことができます。経過のなかでがんが疑われる場合は組織検査が必要です。良性腫瘍でもサイズが大きく圧排症状が強い時には内分泌外科と相談することが必要になります。しかしこのようなことはまれです。

甲状腺の「働き」と「形」の異常について述べましたが、3～6か月に一度の定期検査でフォローしてゆけば心配ありません。